

大阪大都市圏 みどりのオアシス

(仮称)

信太山里山自然公園基本構想

第一次案

里山のみどいを守り

みどいと親しみ

多くの生物と共生を！

信太山に里山自然公園を求める連絡会

はじめに

1997年（平成9）頃より、防衛庁（現防衛省）が演習の効果的で効率的な使用を図る目的ですすめた「介在地民有地解消事業」に呼応して、和泉市は演習場内の民有地を土地開発公社を介して買収し、買い取った土地と演習場の土地を交換し公共施設の整備などの用地とする「北部地域公共施設整備事業」をすすめた。その結果、2004年（平成16年）交換が実施され、演習場内の約16haが和泉市有地（現開発公社所有地）となった。この整備事業の計画では、交換した用地はスポーツ公園を中心に位置づけ、サッカー場、野球場、テニスコート、駐車場など大型の開発事業が企画されていた。こうした計画は地元地域を含め市民にはほとんど知らされず、市議会でも充分審議を尽くしたとは云えないまま進行した。その後、この整備事業計画は和泉市の財政状況により、「凍結」され、現在に至っている。

信太山丘陵は、陸軍に続き戦後自衛隊の演習場として利用されてきたこともかかわって高度経済成長に伴う開発の動き等から一定守られてきた。大阪近郊から里山や田畑が次々と消えていく中で、信太山丘陵は大阪近郊の貴重な自然環境を残す地区となっていく。和泉市有地となった16haの部分は信太山丘陵のごく一部に過ぎないが、貴重な環境として特筆される湿地も含んでいる。

私たちは、この整備事業計画の内容に驚き、大型開発を止め、自然を保全し活用する計画への変更を求めて、2009年7月、61団体、4,526名の署名を添えて和泉市長へ要望し、見直し検討の回答を得た。

この頃、「生物多様性」とよく言われる。地球上に生存する様々な多様な生き物。わたしたち人間もその一つとして生存し、自然界に守られ、恵みを受けて生きている。しかし、毎年4万種ともいわれる種が消滅しているといわれ、「地球温暖化」の危機と同様「生物多様性の保全」は地球的な規模の課題となった。わが国も「生物多様性基本法」を制定し（2008年）保全を図るための基本原則や方向を示した。また、今年10月、名古屋で190ヶ国余りが参加し「生物多様性条約締約国会議」（COP10）の国際会議が開催される。

信太山丘陵は大阪近郊では珍しく生物多様性が豊かで、大阪の「ホットスポット」（多様性が豊かでありながら危機に瀕している地域）の5番目という植物学者の指摘もある。この丘陵の保全と活用は、まさに地球的課題と軸を同じくするものであり、「生物多様性基本法」が「今こそ、生物の多様性を確保するための施策を包括的に推進し、生物の多様性への影響を回避し、又は最小としつつ、その恵沢を将来にわたり享受できる持続的な社会の実現に向けた新たな一步を踏み出さねばならない」ということに迫るものである。

私たちは、以上の観点から、新しい市有地の保全と活用についての考えを「(仮称) 信太山里山自然公園基本構想」第一次案として提言する。

2010年5月27日

－大阪大都市圏の緑のオアシス－

(仮称) 信太山里山自然公園基本構想 (第一次案)

1. 対象地の自然環境と現状

A 大阪を代表する信太山湿地群と草原が点在

大阪府に於いてため池を除けば、大きな規模の湿地はほとんどなく、信太山丘陵は大阪を代表する湿地群となっており、大小10数カ所点在している。その特有の環境から湿地特有の動植物を育て、生物多様性保全上きわめて貴重な生態系である。その湿地は大別すると谷筋にある低層湿地と湧水を源とする涵養湿地であり、対象地にはその両方の湿地が数カ所現存し、貴重な生物・植物の生育条件を提供している。また、丘陵部は貧栄養の赤土により樹林化が押さえられ、ネザサ・チガヤ等を優占する草地(草原)が広がり、食虫植物のイシモチソウなど絶滅危惧種をはじめ、ウスバカマキリ、セグロイナゴなど希少種の昆虫類も確認されるなど生物の多様性保全上貴重な環境を残してきた。

B 里山の自然環境を残す大阪では限られた場所

戦前から陸軍の駐屯・演習場であったとはいえ民有耕作地が複雑に接した信太山では、薪や柴の採取、山焼きなども認められ、春にはワラビ採り、秋にはキノコを採るというように人々の暮らしと深い関係に置かれてきた。このような、人々の暮らしと深く関わってきた里山は、大阪近郊では都市化や宅地化などにより次々と姿を変え、その多くは消滅した。

信太山丘陵に残された、日本の原風景ともいえる里山の自然と景観は和泉市のみならず大阪府下的にみても貴重な環境を残している。

C 希少動植物の宝庫、野鳥は100種に迫る。

① 希少植物

- サギソウ (ラン科)・・・絶滅危惧Ⅱ類
- トキソウ (ラン科)・・・絶滅危惧Ⅰ類
- コバナノワレモコウ (バラ科)・・・絶滅危惧Ⅰ類
- イシモチソウ (モウセンゴケ科)・・・絶滅危惧Ⅱ類
- イガクサ (カヤツリグサ科)・・・絶滅危惧Ⅰ類
- ミズギボウシ (ユリ科)・・・絶滅危惧Ⅱ類
- モウセンゴケ (モウセンゴケ科)・・・準絶滅危惧
- コモウセンゴケ (モウセンゴケ科)・・・準絶滅危惧
- コシンジュガヤ (カヤツリグサ科)・・・準絶滅危惧
- キキョウ (キキョウ科)・・・準絶滅危惧種

ウメバチソウ (ユキノシタ科)・・・要注目種

ミミカキグサ (タヌキモ科)

ホザキノミミカキグサ (タヌキモ科)

キセルアザミ (キク科)

② 昆虫・小さな生き物

ウスバカマキリ (カマキリ科)・・・絶滅危惧Ⅰ類

セグロイナゴ (イナゴ科)・・・準絶滅危惧

クルマバッタ (バッタ科)・・・要注目種

カスミサンショウウオ (両生類サンショウウオ科)・・・絶滅危惧Ⅱ類

カヤネズミ (ほ乳類ネズミ科)・・・要注目種

*ハッチョウトンボ (トンボ科)・・・準絶滅危惧はここ数年確認できていない

*ナニワトンボ (トンボ科)・・・準絶滅危惧・同

③ 野鳥

ミサゴ (ワシタカ科)・・・要注目種

ノスリ (ワシタカ科)・・・要注目種

ハイタカ (ワシタカ科)・・・要注目種

オオタカ (ワシタカ科)・・・絶滅危惧Ⅱ類

ホトトギス (ホトトギス科)・・・準絶滅危惧

オオヨシキリ (ヒタキ科)・・・準絶滅危惧

カワセミ (カワセミ科)・・・準絶滅危惧

オオバン (クイナ科)・・・準絶滅危惧

* 対象地に隣接する場所でのオオタカの繁殖をはじめ、信太山では年間100種近い野鳥が確認され野鳥のサンクチュアリにとの声もある。

* 各カテゴリーは「大阪府における保護上重要な野生生物」(2002年)による

2, 立地条件など 大阪府下的な自然保護・活用地域が遠望

① 大阪市立信太山野外活動センター

「青少年がスポーツ、野外活動、研修などの活動を通じて友情を深め社会性を身につけ創造的な活動力を高めるための社会教育施設」とその目的を掲げ、野外炊事、自然観察、スポーツ活動、その他の野外活動を展開している。広さは約17haに及び、青少年の家(宿泊定員200名)キャンプ場(宿泊190名、日帰り400名)などの宿泊・炊事・野外活動の施設を有している。

年間の利用者は45,000名に及んでいる。

② 大阪府・大阪みどりのトラスト協会が管理する惣ヶ池湿地

信太山の自然の保全・保護運動の影響を受けて、1998年(平成10)・1999年(平成11)大阪府によって泉北水道企業団所有の放棄水田を中心に保全事業が行わ

れた。(環境省補助事業)、その後、管理を「大阪みどりのトラスト協会」に委託し、ボランティアによる管理作業が行われている。当初、信太山全域の湿地群の保全が検討され、調査が行われたが保全事業は「惣ヶ池湿地」に限定されている。ここは、低層湿地として、多様な動植物の生息地、生育地となっており、なかでも、カスミサンショウウオやコバナノワレモコウはこの湿地のシンボルとなっている。

この惣ヶ池湿地が保全されたのを契機に、周辺での市民の散策やジョギング、観察会など著しく増加した。また、2002年(平成14)に学習施設「信太の森ふるさと館」のオープンに伴い、「信太山ネイチャークラブ」による観察会が定例化している。

③ 大野池・惣ヶ池と水辺の景観

和泉地方の降水量の少なさを補い、農業用や生活用水確保のため、古代以降信太山丘陵とその周辺に約40のため池が築造されてきた。現在、農地の減少に伴い工業用地や宅地として埋め立てられ、ため池は減少した。対象地の周辺では大野池と惣ヶ池が隣接し水辺の環境と景観を呈している。

特に、大野池は信太山のため池最大の満水面積を持ち(約22ha)悠々とした景観は人々に安らぎを与え、野鳥たちの飛来も多く、冬場にはミサゴ、ノスリなど猛禽類も姿を見せ、営巣を目指している可能性すら伺える。惣ヶ池もまたカモ類の飛来が多く、その景観は四季折々さまざまな変化を見せる。

④ 国史跡「和泉黄金塚古墳」とネットワークも視野に

信太山丘陵の最北端に2008年(平成20)に国史跡に指定された「和泉黄金塚古墳」があり、その周辺整備が検討されている。里山自然公園とのネットワークを結べば自然と文化財の結合したエリアを創出できる。

⑤ 歴史体験と新たな文化創造

信太山丘陵は弥生遺跡、信太千塚、須恵器窯跡、など歴史遺産がゆたかである。なかでも須恵器はわが国最初の伝来の地といわれ、「日本の陶器のふるさと」といえる。地域周辺の須恵器窯跡窯跡との連携や再現などの歴史体験は新たな文化創造の契機となる。

⑥ 里山自然公園の拡大

「大阪市立信太山青少年野外活動センター」「惣ヶ池湿地」につづいて対象地に「里山自然公園」が実現するなら、大阪を代表する自然保護・保全・活動のエリアが実現し多くの人々に親しまれ、活用されるであろう。

さらに、将来に向けて、自衛隊演習場の払い下げ、または共同利用などさまざまな形態、段階での信太山丘陵の活用が遠望できる。

3, 里山自然公園の内容

里山自然公園の内容については、さまざまな人々が参加し、どのような公園が望ましいのか、いろんな角度から検討されることが必要である。原則的には次の視点が考えられる。

(目的)

- ① 里山としての信太山の自然、信太山湿地・草原の保全と活用
- ② 信太山の自然や文化財の学習・教育・研究・憩いの基地
- ③ 大阪の歴史的風土に立脚した新しい文化創造の基地

(施設・設備・概要)

- ① 施設など建造物は極力さける。管理棟（事務室、案内・休憩・展示場、倉庫、トイレ）、園内数カ所にトイレやベンチ程度
- ② 信太山特有の植生を大切にし、公園用樹木など他より移植することは避ける。
- ③ 散策路などは現状の小径を元にししながら若干の整備をする。

(管理・運営)

- ① 「湿地再生地区」「湿地保全地区」などをつくり、公開・非公開など分類して管理する。
- ② 地元のボランティアグループなどに日常管理、保護・保全業務、案内、研究・調査活動など管理・運営を委託する。
- ③ 植生の保全、枯れ木・倒木の処理、下草刈り、間伐などの作業は学者・研究者などとの連携のもと計画的に行う。一部は体験学習の中に位置づける。
- ④ 入場料は無料とする。

4, 里山自然公園の利用・活動例

- ① 「緑のオアシス」として憩いと安らぎの場の提供
- ② 住民達の健康と憩いのジョギングや散歩道
- ③ 市民を対象とした観察会・学習会
- ④ 小中学生の自然観察や研究・学習
- ⑤ 山菜キノコの研究・学習
- ⑥ 伐採・草刈りの体験学習
- ⑦ ネイチャーゲームなど自然との触れあい
- ⑧ 里山の自然に関わる研究
- ⑨ 鳴く虫・野鳥の観察会
- ⑩ 須恵器や古墳など歴史学習

自然と人々のくらしの再発見

こども達に興味と感動を与え、自然と暮らす知恵や恩恵の再発見

整備された博物館とは異なる 新鮮な感動と生き物との共鳴

5, 対象地の植生分布と計画の基本構想

A 植生分布概念図 (図: 植生分布概念図参照)

対象地の現在の植生分布はおおむね以下のように分類できる。

- ① アラカシ植林 1980年代自衛隊により植栽されたアラカシ、トウネズミモチなどの成長したところ。30年程が経過し、林床は太陽光のあたらないほど成長している所もある。
- ② マツ・雑木群落 高木のマツが次第に枯れ、落葉広葉樹(コナラ・サクラ)や常緑樹(アラカシ・ウバメガシ・ヒサカキ・シャリンバイ)などに遷移が進んでいる。
- ③ 常緑樹群落 アラカシ、クロバイ、ヤマモモ、ウバメガシなどの高木が優占し、幹まわり1m、高さ20mを超えるものもある。
- ④ マツ群落 アカマツ・クロマツが広がり、アカマツはこの丘陵の代表的な樹種であったがコナラなど広葉樹にしだいに遷移している。ただ、比較的若いアカマツ、クロマツには樹勢がうかがえる。
- ⑤ コナラ群落 高木としてコナラが優占する落葉広葉樹林。比較的明るい林を作り、樹林化がすすんでいるこの丘陵での優占種の感があり、里山の雑木林の景観を形成している。惣ヶ池湿地との隣接付近はアベマキの群落も広がっている。低木層にはツツジ類(ヤマツツジ、モチツツジ)の群落がある。
- ⑥ ネザサ・ススキ群落 信太山丘陵の特色の一つである草原を形成。短いネザサとチガヤ、ススキなどの群落があり、イシモチソウ、イガクサをはじめ、ウスバカマキリ、セグロバッタなど絶滅危惧種の動植物の生育環境となっている。
- ⑦ ササ・低木 1m以上伸びたネザサの勢いが強く、かつて全山を彩ったツツジ類などは衰退している。
- ⑧ 竹林 タケ(ハチク)の侵入が見られ、広がろうとしている。
- ⑨ 湿性植物群落 サギソウ・トキソウ・カキランなどのラン科植物をはじめ、食虫植物のモウセンゴケ、コモウセンゴケ、ミミカキグサなど希少種の湿地植物が育つ。この群落が育つ湿地周辺にはカスミサンショウウオが棲息し、数年前までハッチョウトンボも確認された。
信太山丘陵の特色の一つ湿地は、涵養湿地、低層湿地ともススキ、ササなどの侵入、周囲の樹林化に伴い乾燥化がすすみ領域は減少している。

B 保全ゾーニングと公園の基本構想（図：基本構想参照）

里山としての自然環境を保全し、信太山丘陵の特色であった草地（草原）と湿地の再生を図り、20年～30年前の状態に復元したい。そのため、自衛隊により植栽されたアラカシ、トウネズミモチの一部は伐採し管理棟や多目的広場、草地（草原）の復元に充てたい。また、以下の保全・再生ゾーンを設定したい。

観察・散策路は現在の小径を整理、一部造成し周遊できるようにする。

- ① **コナラ・雑木保全ゾーン** マツ類が衰退しコナラ、雑木などの樹林へと遷移がすすんでいる。自然の推移に任せながら枯死した倒木の処理、下草刈り、間伐など一定の管理、保全のための取り組みが求められる。特に、コナラ群落の樹林化の拡大については丘陵の全体像に深く関わるため、十分な検討と慎重な計画が必要である。

（野鳥の森、どんぐりの森、ヒヨドリノ森、ウグイスの丘）

- ② **常緑樹保全ゾーン** クロバイ、ヤマモモ、ウバメガシ、クスなどの群落地を管理・保全、森林浴や散策に活用。 （照葉の森）

- ③ **マツ保全ゾーン** 信太山の特色ともいえるアカマツ群落を基本的には自然の推移に依拠しながら保全する。ただ、密集したアカマツの群落は適度な間伐を行うなど計画的に管理する必要がある。

（すみれの小径）

- ④ **草地（草原）保全ゾーン** 丘陵部は路地部分にネザサやチガヤ、ススキの群落が育ち、イシモチソウ、ウスバカマキリなどの希少種の動植物が生息する環境となっている。信太山丘陵の特色の一つ草原を保全し、かつて植栽で消えた草地の再生や復元を計る。

（バッタの原、スズムシ・カンタンの小径）

- ⑤ **湿地保全ゾーン** トキソウ、サギソウなどの希少動植物が生息する湿地を保全する。そのため、ササやススキの侵入、日当たりを確保するための周辺草木の伐採など計画的に行う。かつての湿地跡を湿地再生地として復元を計る。公開湿地と非公開湿地を区別したい。

（ビオトープの池）

- ⑥ **低木・ササ保全ゾーン** かつて信太山の象徴であったツツジ類の再生を計り、ササの刈り取りなど計画的に行う。 （つつじの丘）

- ⑦ **竹林** 竹林の広がりを押さえる。

なお、これら保全ゾーニングについては、さまざまな観点をふまえ、さらなる慎重な検討が必要だと考える。

6, 里山自然公園の性格・位置づけについて

対象地の自然を保護・保全し活用を図るための関連制度には以下の3つの場合が想定される。

- ①「大阪府自然環境保全条例」に基づく「府緑地環境保全地域」の指定を受けて保全・活用を図る。
- ②「都市緑地法」に基づく「緑地保全地域制度」の指定を受けて保全・活用を図る。
- ③「都市公園法」に基づく「都市林」として保全・活用を図る。

私たちは、原則的に①を要望してきた。ただ、それに固執するものではなく、諸条件をふまえて和泉市の判断を仰ぎたい。